

第1分科会

「ショートフィルムフェスティバル」によるまちづくり

特定非営利活動法人 南大阪地域大学コンソーシアム

難波 美都里

学生発表者 辻村真依子（大阪芸術大学4回生）

1. はじめに

本分科会では、「学生・市民が担うまちづくり」とそれらの活動を通じて見出される「学生の成長」と「地域の創造」をテーマとする中で、南大阪地域大学コンソーシアム（以下、「南コンソ」と記す。）からは2004年度から実施してきた「学生国際ショートムービー映画祭」の事例を紹介した。本映画祭は、若い才能の発掘と支援をめざした芸術系学生のインターンシップの取組として位置付けており、2005年度から事業化し、今年で第8回を迎える。2007年度から「CM商談会」を新設して映像クリエイターの学生たちに企業CM作りのインターンシップの機会を創出した。また、今年度から有償にて映画祭事業のパッケージ提供を始めた。発表では、映画祭の内容を簡単に紹介し、その後、映画祭に参加した学生が、映画祭の参加を契機に南コンソの活動を通して社会とつながっていく様子や成長した姿を発表した。

2. 映画祭について

映画祭のきっかけは、2004年に学生クラブ・アクトリーダー会の学生が提案した関西国際空港(株)のクリスマスイベント企画の1つに「空港で行う映画祭」というのがあったことに由来する。確かに、世界的に見て空港で行われている映画祭はその当時見当たらなかったし、現在でもその存在を知らない。その発想が面白いことと、会員大学には芸術系の学部や学科をもつ大学が複数あり事業を進めるうえで協力体制ができることから、事業化が決定した。「空港で行う映画祭」にこだわった方がもうお一人いる。それは、当時大阪芸術大学芸術学部映像学科長で、第1回から第2回の本映画祭審査委員長に就任いただいた中島貞夫先生である。「極道の妻たち」で著名な映画監督でもいらっしゃる。映画祭の事業化に向けた相談に伺ったとき、関西国際空港（以下、「関空」と記す。）で実施するということが意味があると言われて、関空での開催に興味を持っていただいた。その理由を伺うと、空港は世界へ広がる窓口でもあることに加え、空港は安全面などから管理が厳しいにもかかわらず中島先生が映画撮影の際に関空は非常に協力的であったことから、そうした場所での映画祭ということに意味があると言われていた。映画祭を行うなら映画に関心をもっていただいているところに限る、そういうことならと私たちも俄然「映画祭の事業化」に向けて勇気がでた。実際、映画祭のオープニング映像を作る際には、関西国際空港(株)には空港内の撮影や映像の提供などご協力をいただくことができた。タイトルに「国際」がついているのは、当時中島先生が韓国のソウルと中国の北京と日本が連携した映画祭の審査員をされていて、どおせなら日本からは東京ではなく、大阪・ソウル・北京の連携に発展すればいいとの思いがあり「国際」を冠につけた。この連携では、第2回の際にこ

の3国映画祭の入賞作品を上映することができたものの、映画祭の連携には至らなかったのが残念である。

映画祭にはいろいろな方にご協力いただき実現しているが、中でも審査員として東京から参加いただいている株式会社キネマ旬報社は本映画祭の趣旨に共感いただき、第1回目からキネマ旬報の現役編集長が審査委員に就任いただいている。小林社長（現会長）は謝金も交通費も宿泊費も出ない全くの手弁当での参加だ。終了後に開催される学生と審査委員との交流会にも参加され、入賞者の学生たちと積極的に交流いただき、まだまだ応募数が少ない中で元気のいい映画祭だと褒めていただいている。小林さんが参加された理由の1つに、当時はケーブルテレビが広がりを見せた頃で、将来的なメディアミックスを視野に入れたとき映像コンテンツとしてのショートムービーに興味を持っていただいたということがあった。関西国際空港(株)では、本映画祭を毎年恒例のクリスマスイベントの一環として位置付けていただいていた。残念ながら南コンソの懐事情で映画祭の会場を昨年度大阪芸術大学のホールに移して開催した。タイトルから「i n 関空」が消えてしまった。

3. 芸術系学生のインターンシップとしてのCM商談会の実施

2007年度から「CM商談会」を実施し、映像クリエイターの学生たちに企業CM作りのインターンシップの機会を提供している。「CM商談会」を行おうと思った理由は、商工会議所の人とケーブルテレビの放映枠についての話をしていたとき、1枠の費用は数万円とさほど高くないのだが、その映像をつくるためには百万円以上が必要で、ケーブルテレビを活用したいと考えている中小企業の人などは、映像制作費が高くて手が出せない状況があることを知った時だった。以前から、映画祭に応募してくる作品のレベルが高く、このスキルを埋もれさすにはもったいないとずっと思っていたのだが、それならこの学生たちの映像スキルを活用してケーブルテレビや企業PRのためにプロモーションビデオを作る仕組みができないかと考えたのがその始まりである。

CM商談会は、映画祭の審査上映会の後に、学生が企業に対して自分の作品の1分間プロモーションを通じてCM制作への売り込みを行い、その場でオークション形式による落札を行ってきた。この仕組みは面白いのだが、関空は大阪市内から遠く企業の人に参加しにくいこともあってうまく機能していない。数年前に映画祭の時以外に商談はしないのかとの問い合わせがあり、現在は映画祭当日のオークションではなく、応募作品と一緒に送ってもらった学生の自己PRプロモーションビデオを使ったCM商談を年間にわたり行っているが、積極的なPRを行っていないこともあり、商談に至った事例は3件にとどまっている。

学生のCM制作については、普段自分の作りたい作品を作っている学生にとってクライアントの意向を活かした作品づくりは多くの困難を伴う。中でも相手の意向を聞き出す力やそれを作品に仕上げていく力が試されている。また、取り扱う事象に対する解釈についても経験の浅さが影響する。南コンソでは、2008年度の第4回映画祭の入賞者に南コンソのプロモーション作品を制作してもらった。その時一番大変だったのが、大学コンソーシアムを紹介するために「大学」や「学生」をどう解釈し、どう表現するかであった。シナリオと絵コンテを作成してもらい何度も意見交換を行ったのだが、自分たちが考えている

学生像と世間からみて評価されている学生像との間にかい離があり、どうしてもネガティブな学生像を打ち出した作品に仕上がってくる。南コンソをPRしようとするのに、ネガティブな作品では使えない。何度も検討を重ねていくうちに、自分たちの作品の良さや特徴を忘れてしまうこともあった。この時の経験から、CM商談会で成約した場合、満足される作品に仕上げるためには、学生とクライアントの間に入り作品化を支援するコーディネーターの存在が重要であることが骨身にしみた。

4. 映画祭のパッケージ販売の開始

今年度から映画祭にかかる費用、といっても南コンソの場合通常の映画祭とは一桁も二けたも違って100万円程度であるが、その費用の捻出と販売による利益をねらって、映画祭をパッケージで提供する取組みを始めた。そのアイディアは自治体からの相談に共通していた効果的な情報発信の方法や特徴ある取組を探していたことに注目し、映画祭はそれらに効果的だと考えた。

今年度、堺市からの依頼を受け、「学生国際ショートムービー映画祭 in 堺」を開催する。堺市では、優秀作品を新たな魅力発信ツールとして活用する予定である。市長会見により堺市での映画祭の開催が発表されたのだが、会見の内容をみると、学生による堺の魅力発見の機会であったり、学生に堺の魅力を知ってもらう機会とするなど、映画祭が地域の活性化に貢献する取組として位置付けられていることが分かる。

5. 映画祭と地域活性化と学生の成長

この分科会では、「協働によるまちづくり」の効果として注目される「学生の成長」と「地域の創造」がテーマとなっていた。今回発表した「学生国際ショートムービー映画祭」を事業化する際には、「協働によるまちづくり」という視点はほとんどもっていなかった。せいぜい、事業化のとき中島先生が言われた映画の撮影舞台としての関空の魅力が映画祭と相乗効果を生み出すことができるかもしれないと思ったくらいである。

南コンソでは、本映画祭は芸術系学生のインターンシップとして位置付けており、「学生の成長」は事業目標そのものでもある。ただ、人材育成の取組みとして効果的なものに行っている要因は、毎年設定されているテーマが現実社会の中でその時代に沿ったものに設定されていることから、作品に仕上げていくときの作業が、課題発見や課題解決型の作業プロセスを踏んでいることが想像される。その思考過程により社会をみる力やそれを分析する力、そこに見出されていく価値、それらを形にしていく想像力や創造力などが映像スキルと相まって作品に仕上がっていくように思われる。テーマを突き詰めていく中で、社会が姿を現してくるのである。応募作品は、一人で制作しているのは実は少数派で、チームで作品をしあげてくることが多い。チームワークの良さは作品にも表れる。映像、音、キャプション、出演者、そして時間と手間とコミュニケーションの具合が仕上がりの質に反映されている。ここで培われた力は学生を成長へと導く。作品を仕上げていくこうした視点が、映画祭が地域の活性化に貢献できる取組みであり学生の成長を促す取組みとして位置付けられる所以なのではないか。映画祭やCM商談会は、今後、芸術系学生の人材育成にとどまらず、地域貢献のユニークなツールとして仕組みを磨いていきたいと思ってい

る。

6. 映画祭への参加を契機に覚醒した学生の発表から

発表者の一人である辻村真依子さんは、映画祭の参加を契機に南コンソの活動を通して社会とつながっていく様子や成長した姿を発表してくれた。

辻村さんは、昨年1年間休学して、同志社大学の学生と二人で制作した東日本大震災のドキュメンタリー映画『真珠の首飾り』を全国で上映し、日経新聞をはじめいくつもの新聞に取り上げられている時の人である。南コンソでは、実録ビデオやプロモーションビデオの撮影&制作、イベントのアナウンサー、イベント企画、小学校のキャリア教育支援など各種の活動に有償で参加してもらっている。これらの活動は、インターンシップとして位置付けているキャリア形成支援事業「学生クラブ・アクト」の活動の一環である。「学生クラブ・アクト」は学生主体の受託事業で、学生は南コンソと有償での契約を結んで参加する取組である。辻村さんがこれらの活動に参加するようになったきっかけは、映画祭への応募だったと言う。

以下は、辻村さんの言葉で綴る・・・当時1回生だった私は、大学の掲示板に貼られている映画祭のポスターをたまたま見つけ、放送学科の友人数名と組んで作品を制作し、応募しました。大学に入って数ヶ月経ち、少しだらけてしまっていた10月頃のことです。そして幸運なことに、私たちのグループはこの年の映画祭で企画賞をいただくことができました。この映画祭がきっかけで、私は南大阪地域大学コンソーシアムと出逢うことになります。以後、私は南コンソを通して、大阪のキャリア教育や道德教育、インターンシップなどの映像制作を仕事として請け負っていくことになりました。

辻村さんは言う。周りの学生たちは、社会への問題意識をあまり持っていない気がして物足りないものを感じていた。南コンソの活動に参加するようになって、それらの活動すべてが社会的な課題や社会をテーマにした取組であったと。活動を通じて感じたことや学んだことは次のようなことだと言う。お金をもらって制作することの責任とプロ意識が芽生えていったこと、映像制作を通して南大阪地域の教育や産業などに触れることができ問題意識を持てるようになったこと、「自己表現としての映像制作」ではなく「クライアントの意向やターゲットのニーズに合わせた映像制作」をしていく必要性などである。

現在の彼女は、南コンソを通しての映像制作の実績をもとに、個人での映像制作事業を展開しており、それが先述した震災のドキュメンタリーや、原発の動画などの制作である。彼女は大学に復帰して現在4回生である。京都でいろいろな大学から集まった学生が運営している活動に参加している。南大阪地域には、京都のような学生が運営する活動母体がほとんどないので、現在友人と一緒に設立のための準備をしている。卒業しても現在の活動を続けたり、その延長線上にあるような活動をしていきたいという。彼女をみると、ある事業がめざす直接的な目的とは別に、いろいろなものに挑戦していく気持ちやそこに向かっていく意志や意欲によってその事業に別の効果が重ねられていくのがよくわかる。

「協働によるまちづくり」の効果として注目される「学生の成長」と「地域の創造」。それは、社会という本モノが学生のもつ本来の力を引き出しているのである。